



国際通りゾーン story

登場人物

津島 武夫 / 北海道出身東京都在住 58歳
 会社員 舞の父
 津島加奈子 / 東京都出身東京都在住 55歳
 主婦 舞の母 向田邦子のファン
 津島 舞 / 東京都出身 25歳 会社員

きっぽん器

ノスタルジックな昭和の雰囲気を感じてもらえるよう、昭和生まれ世代である50〜60代の中年をメインに据えたストーリーを展開。「国際通り」おみやげショップだけでなく、すーじ小(すーじぐわー、沖縄言葉で小道、細い路地の意)の魅力やグルメも伝える。

旅のキツカケ

連休は突如として沖縄旅行に決まったらしい。
 らしいというのは、例によって妻の加奈子が、旅行計画を進めているからだ。
 なぜ、急に沖縄なのか？東京から行ける温泉でもないではないか。
 「けなげな女房をもった亭主は、女房に死なれたら哀れなんだって。私にもしものことがあつたらあなた大変よ。楽しんでいられるのは今のうちなんだから・・・あ、向田さんが書いていたんだけどね」
 加奈子は私の質問に茶目つぷりに答えながら、せつせと旅の支度を進めている。
 僕は知っていた。彼女が急に沖縄旅行を言い出したのは、図書館から借りてきた向田邦子のエッセイ『沖縄胃袋旅行』(※1)を読んだからだった。
 食通でもあった向田邦子のこのエッセイは、彼女が寸暇を惜しんで出かけた沖縄の魅力が満載のようである。
 「さ、明日は早いよ。きっぽん探しにいざ、南の島へ」
 「きっぽん？」
 加奈子は自分の準備だけは整ったようで、ガチャんとトランクを開けるとなすいた。

国際通り

娘の舞に見送られ、飛行機で2時間ほど揺られて目が覚めると、そこは沖縄だった。
 南国の強い光は、逆に夢の中にいるようだ。メインストリートの**国際通り**近くのホテルに着くと、荷を解いた。
 「さて、どうしよう」
 そんな顔をしている僕に
 「この近くの平和通りに向かい、公設市場をのぞきます。まずは沖縄の食材を確認、この本に」
 ニヤリと笑う加奈子の片手には、やっぱり向田の本があった。どうやら、書いてあることを全部なぞるつもりらしい。
 「30年も昔に書かれた本だから今もこの通りかどうかわからないけど、違いを感じるのも楽しいと思うのよ」
 初めての沖縄旅行なのに違いを比較するなんて、加奈子らしくってなんだか僕も楽しくなってきた。

桜坂

僕は、平和通りへの抜け道である**桜坂通り**にやってきた。
 レトロなバーや、懐かしさが残る映画館がある。
 「ここ、**桜坂劇場**だって・・・」
 ちょっと沖縄返還の時のドキュメンタリー

平和通り

映画をやっていた。映画館が独自の路線で興味深い作品を選び上映をしているらしい。また、映画館なのに2階には『やちむん』と呼ばれる沖縄の焼き物や工芸品が販売されている。
 近くには、ステーキ屋、沖縄そば屋など沖縄っぽい飲食店もあるが、インドカレー屋や、日本そばと天ぷらなど、かなりバラエティーに富んだ店が並ぶ通りだ。
 「ここが、向田さんのエッセイにある、衣類を扱っている市場」
 「ここが、**牧志公設市場衣料部**と書いてある。戦後、この一帯に闇市が広がったことから始まったらしい。
 「みんな女性の店主なのよ。あ、エッセイの中ではね。なんでも戦争未亡人たちを中心に、戦後闇市が広がった後、バラックを立て替えた小さいお店から始めたらしいの」
 加奈子の解説を聞きながらよく見ると、店主不在のような店もある。僕は物色するには好都合なので、近寄ってみた。
 「いらっしゃい」
 向こうの店から、おばちゃんが走ってきた。
 「このおばさんは今留守だから、あたしに聞いて。何？お孫さんの七五三かなにか探



国際通り



平和通り

してるってここにないものは他の店にもあるから紹介できるよ」
 僕は顔を合わせて笑ってしまいました。エッセイの書かれた80年代とまんま同じなのである。女性たちは同じ職種でもみんな仲が良く、冠婚葬祭の付き合いもあるほどだという。だから外出中の店番はお互い様というところらしい。表では扇を並べて売っている



第一牧志公設市場



呉屋天ぶら屋



petite rue ブチット・リュ

おしく思えてくる。小さな通りは、沖縄の大きな歴史を教えてくれた。

第一牧志公設市場

「ついに来たわよ、公設市場！」

加奈子が興奮している。

「これが邦子が感動した沖縄の胃袋…この景色、行きかう人や商品を運ぶ台車の音…」

「邦子って…」

「あら、いい香り。乾物屋さんかしら」

入り口には乾物屋さんがあり、かつお節の香りがする。沖縄料理というと豚肉料理を思い浮かべるが、出汁に使う鰹節を日本一消費するのも、沖縄の県民性なのだが。

市場の建物内に入ると、色とりどりの新鮮な魚。見たこともないものもいて、眺めているだけでも楽しい。まだ動いている伊勢海老や、ガサミとよばれるカニ。まるであの沖縄美ら海水族館に入ったようだ。

そして、やっぱり豚肉。プタちゃんたちの圧倒的迫力に最初は驚くが、なぜか慣れてくる。

ここもやはり女性が多い。切株のようなまな板で豚肉をカットするおばちゃんたちを見ていてだけで、元気をもらえた。

また、魚や肉だけでなく、ゴーヤー、ヘチマなどの野菜も豊富だ。パイヤも並んでいるが、ここでは野菜として扱われているようだ。新鮮な食材は、2階の食堂でそのまま

僕は、沖縄の食材にすっかり魅了されてしまった。

浮島通り

さすがに、お腹もいっぱい。市場を後に、少し歩こうということになった。

世界級の巨大シーサーがいるという、浮島通りに向かう。

壺屋うぶシーサーという名のこの巨大なシーサーは、沖縄の守り神だそうだ。

歩いている人に頼んで記念撮影をし、スマホで撮った画像を娘に送ると、すぐに返事がきた。

「はいしゃいじゃって…ハハママ、20代カップルのようです(笑)」

「フフフ…調子にのって僕らはあることを決行する。」

浮島通りは、長い一方通行の通りにおしゃれ



きっぱん

開南と呼ばれる地域に入ると、加奈子は歩いている人に声を掛けだした。「きっぱんのお店は何処ですか？」としきりに聞いている。「きっぱんってナンダ？そついえは、東京にいる時から「きっぱんを探す」と言っていた。

調理してくれる。

市場内だけの話ではない。この付近には、屋から一杯が楽しめるリーズナブルな店も多い。

地元おすすめ、市場に来たら「コー」と評判の「呉屋天ぶら屋」という店に足を運ぶ。

ここでは魚からイカ、野菜、サーターアンダギーまで、揚げたてアツアツの天ぶらをいただける。

しかし、天ぶらというよりは衣がたっぷりのフリッター。イギリスのフッシュ&チップスのようなファーストフードだ。

袋に入った天ぶらを、その場でハフハフと熱いうちにほおばる。実にうまい。

「うまかったね」

「うん、逆にお腹空いてきちゃった」

「ウソー今、天ぶら食べたばかり…」

「へっだって『天ぶら』って沖縄の人のおやつなんですけど…。でさ、行ってみたいお店があるの。市場の食材を生かしたフレンチ。でも、気軽に行けるとこなのよ」

僕を引っ張る加奈子の反対の手には、お土産の沖縄のドーナツ、サーターアンダギーの袋が…僕は加奈子の迫力に身を任せるしかなかった。

「いらつしゃいませ〜。はい、津島様ですね」

「ブチットリュ」という店に着くと、しつかり予約が取られていた。

「カンパ〜イ！」

「うま〜」

前菜でオーダーしたマグロタルタルのうま

「加奈子、今更だけど、きっぱんってなんだい？」

「幻のお菓子。オクニも苦労して探し出した琉球王国時代のお菓子よ」

だんだん呼び名が変わるのはさておき、向田邦子は小学生の頃鹿児島に住んでいて、保険会社に勤める父親が沖縄出張の時に、お土産で買ってきたものらしい。

小さい頃の甘い思い出が記憶の中に残り、作家として成功した1980年代に沖縄を訪れた時に、きっぱんを探し回ったものの、すでに沖縄の人の記憶からも忘れ去られており、訪ねても知らない人が多かったという。

「といつことは、戦前？」

「そう、お父さんのお土産って沖縄産ではなく記憶違いだったかとも思ったんだけど、開南ってところにあつたそうよ」

「開南って地番にもない、地名でしょ。30年前の話だし、大丈夫かな」

しばらく2人で尋ねたが、観光客や若者も多く「きっぱん」を知る人はひとりもいなかった。やはり幻のお菓子屋さんはもうないのだろうか。

30年前、僕らが結婚した時にはあつたはずのお店。

手がかりが得られず次第に悲しそうになる加奈子を見て、僕はなんとかして探してあげたいという気持ちになった。

「ここで待っていて、加奈子」

僕は走った。アグーのTシャツを着たボク

さに僕は思わず大きな声を出してしまった。

「ね、だから言ったじゃないの。全然入るでしょ。那覇は、有数なマグロ水揚げを誇る都市だから新鮮なの。那覇をなめるなよ(笑)」

選んでもらったワインもよくて、島の素材ともよく合った。



壺屋うぶシーサー



謝花きっぱん店

のぜい肉が踊る。

さっきの居眠りしていた農連市場のオバア、あの人ならきつと知っている。

さすがに60近いと走るのも大変だ。でも走らずにはいられなかった。なぜならあの居眠りオバアが店をかたつけて帰ってしまつたのではないかと思ったからだ。

案の定、お店を開けて引き上げるところだった。

「ハア、ハア…す、すみません」

「なんね〜兄さん、あい、カワイイTシャツ着て。カカカカ…」

金歯を見せて笑うオバア。

「ハア、ハア…あの、突然すみません、きっぱんってご存知ですか？ハア、ハア」

「あくジャハナサンね〜」

「いや、きっぱんです。お菓子の」

「うん、だから謝花きっぱんよ」



栄町市場



COFFEE potohoto (ポトホト)

料理。本格ワインが手軽に飲める店…とて
もじゃないが、一晩では堪能できない。
中でも一番興味を引かれたのは、山羊料理。
地元でも好き嫌いが分かれるというが、ハマ
ると月に一度は通いたくなるものらしい。
「山羊料理 美咲」は有名な老舗のようで、料
理はもちろんだが、おかみさんのおしゃべり
も楽しいらしい。楽しすぎて、注文も忘れて
しまうほど愉快な方で、おかみさんのファン
も多く、すぐに満席になるといふ。なんだか
そこにも興味を引かれて、ダメ元で向かっ
た。ラッキーなことに、ちょうど帰る客と入
れ違いにカウンター席が空いた。
ビールと山羊のお刺身を注文。噂は本当だっ
た。他の客ともすぐに打ち解け、僕は楽しい
那覇の夜に酔いしれた。
居合わせた80代の大先輩が、沖縄の言葉を
教えてくれた。
「イチャリバチョーデー」
居合わせれば兄弟のようなもの、『袖振り合
うも多生の縁』という意味だ。
大先輩は子どもの頃に戦争疎開で沖縄を離
れ、戦後沖縄に戻ると、親友がいなくなっ
てしまったと寂しそうな笑顔で言った。
イチャリバチョーデー。山羊のお刺身のコリ
コリした食感をかみしめた。
素敵な夜だった。
ほろ酔い気分が帰ろうとすると、おかみさ
んに声をかけられた。
「帰る前にステーキ88行くの忘れないでよ。
場所、大丈夫？」

「え？」
「きつぱんといったら、謝花きつぱんしかない
よ。向こうにあるよ、兄さんが走ってきたと
ころ」

「あ？戻るのですね」
オバアは片付けの手を止めて、詳しく場所
を教えてくれた。
「ありがとございます、ところであの縄な
んですか？」

「あ、あれね。兄さんに一つあげよう。いいこ
とがあるからね」
元来た道は登り坂だったけど、足取りは軽
かった。オバアからもらった縄のお守りのお
陰だろうか。足取り軽く、ちょっと得意気に
戻ると、加奈子は困ったような顔で待ってい
た。

「加奈子、分かったよー」
「ありがと、こつちも分かったよーホラー」
加奈子が最近買ったスマホで地図を見せな
がら言った。
「な、なら最初から…」

「でもね、地図の見方が全然分からないの
よ、沖縄の地名って難しいわ」と僕の言葉を
ささざるように話した。
県立那覇高校のすぐ近く、国際通りへ抜け
る道にそのお店があった。
なんでも皇室も噂を聞き、お買い求めになっ
たとか。

向田邦子がい求めたのは先代の時代、今
はそのお孫さんで、先代と同じく女性店主
であった。沖縄の歴史は女性が作っているの
「そっだった！ありがとございます」
「私はオーダーは忘れるけど、あなたの予定
は忘れないヨ」
おかみさんの気遣いのお陰で、なんとか「ホ
テルで待つヤギ」への土産を買った。

那覇大綱モニュメント

翌朝目が覚めると、不思議と酒は残っていな
い。泡盛が体に合うのか、大先輩にすすめら
れたウコンのおかげか。
「あら元気ね。おはよう。昨夜は遅かったん
じゃないの」
加奈子が起き出した。
眠らない街の朝はどうだろう。朝食前に2
人で散歩した。

那覇には大きな祭りがある。10月10日の那
覇大綱挽とゴールデンウィークの那覇ハー
リーというドラゴンボートレース。ホテルの
人が言うには、この2つのお祭りを体感で
きるものが近くにあるという。
まずは**爬龍船**へ。目印となる牧志駅に近づ
くと、そこには昨日写真を撮った巨大な、う
ふシーサーと同じものがある。どうやらペ
アとなっているものがここに設置されてい
るようだ。(さいおんうふシーサー)
その向こうに、巨大な黄色い船が見えてき
た。爬龍船だ。
ハーリーとは、中国に由来する爬龍船競争の

ではないか？そんな気がしてならなかった。
謝花きつぱんを出ると、暗くなっていた。
「今日はありがと」

めずらしく加奈子が腕を組んできた。僕は
縄のお守りを握りしめた。

ホテルに戻ると、加奈子はすでにきつぱんの
包装を解いていた。「甘くほろ苦い…おと
なの味よね。ひとつの店でずっと受け継が
れてきた歴史を感じる。長年の夢がかん
たわ。それにしてもびっくりした、あなたが
まだ走れるなんて」

「加奈子のためならね」

「はいはい、それは既読スルー…。それよ
り、きつぱんって沖縄のお酒とも合いそうね」
「そっだね。これをかじりながら泡盛を…
そっだー思い出した。加奈子、山羊料理食
べに行かない？**栄町**ってところにある
美咲って老舗」

「ちょっとなよ、夢かなくて、うっとりして
いる時にそのスタミナマッチョなアビール
は！」

「ハハハ。そんなんじゃないわ、むしろ逆。
沖縄では滋養にいいと、食べられてきた食文
化なんだよ。山羊料理と古酒泡盛の相性は
抜群なんだって」

「ちょっとワイルドすぎるわ。あたし、実はコ
レ食べたいんだ」

加奈子が袋を持ち上げる。さっき買ったサー
ターアンダギーだ。

「沖縄の美味しいコーヒーと合うと思っ
て買ったんだ。こだわりコーヒーの店も確

か、栄町よ。行く。」
「えっ…今度は僕のリュックエストに付き合っ
てよ」

加奈子は躊躇する僕にかまわず、**potohoto**
(ポトホト)というコーヒー店の店主のこだ
わり、豆に対する愛情などを話し始めた。
「コーヒーは、その土地の水を使うのよね。
気温、湿度、ベストなコンディションで淹れ
たコーヒーと、その土地のお菓子、サーター
アンダギーを楽しむのが…」

「分かった、分かった。その通りだ。うん、別
行動にしよう」
僕はホテルの部屋を出ようとした。
「ちょっと待って」

加奈子は、僕の腕を引っ張り、引き止めよう
とする。

「メン加奈子。山羊はゆずれないよ」
「いつてらっしゃいメェ、でも帰りに**ステ
ーキハウス88**で琉球バーガーのお土産買って
こいメェ」

「負けた完全に負けた。ホントに胃袋旅行だ
わ。分かった。琉球バーガーね」
ヤギを1人残して僕はホテルを出た。

栄町

…といいつつ、これは想定内だった。
宵越しの酒場は、男1人がよく似合う。夜の
那覇は老舗だけではなく、その雑多な食文
化が現在進行形だ。人気の立ち飲み、ものす
ごくおいしい餃子のお店。『くびち』という豚



ステーキハウス88 国際通り店



山羊料理の店 美咲



那覇ハーリー爬龍船モニュメント



那覇大綱モニュメント



壺屋やちむん通り

「えーそれって昨日のお守り？」
お店に掛けてあったのも、これだったんだと納得。
後で知ったが、那覇大綱挽の綱も龍であるという※2。龍を引き合っことで雨を呼び、豊作を祈願するというものらしい。僕がもらったのは龍のウロコのようなものか。これは、世界級の御利益がありそうだ。

壺屋

ホテルに戻り、2人で朝食を食べていたら、ヌボが鳴る。娘からだ。昨日送信した画像が急に恥ずかしく感じた。
「舞、なんだって？何かあった？」
加奈子は母親の顔になった。

「壺屋に行ったっ……だっせ」
昨日送った画像には触れられていなくて少しホッとする。
「壺屋って、あなたが好きな壺屋焼の？」
「そう。舞がおすすめの窯元を教えてください」

「で、昨日の写真には何か言ってる？」
僕は、再び恥ずかしくなってしまう。しばらく黙って、昨日覚えた言葉で返した。
「既読スルー。ははは…照れてんのかもな」
「彼氏とデート中で忙しいのかしら？」
「なんだそれ。わが娘、もらってくれる人がいるだけでもありがたいけどな…」
「ウフフ、さあ、そろそろ出かけますか？」
「ごっま」

「…え？」
ビックリする僕の側で、加奈子がこらえきれなくなつて笑い出す。
「あっははは。舞、出ておいで」
なんとそこには、娘の舞が居た。
「ど、どーゆーことだ？」
「そーゆーことよ、パパ、ね、舞」
「な、お前知っていたのか？だましたな！」
「まあまあ、もらってくれるだけでも、とか言ってたじゃないの」
ここで、舞が割って入り真剣なまなざしで話



南又窯



壺屋やちむん通り

「行くんでしょ。壺屋やちむん通りにある窯場」
そう、実は出発前に娘にすすめられていたのだ。
娘は修学旅行で沖縄を訪れ、それ以来よくちよく沖縄に来ている。
僕に似たのか、焼き物が好きだ。
那覇国際通り裏にある焼き物の里は、王国時代の1682年、各地にあった窯場をここに集めたそうだ。
あまり知られていないが、伊万里や唐津、平戸焼や薩摩焼と同じく、あの秀吉の朝鮮出兵の際に、日本に渡ってきた朝鮮人陶工たちの影響を受けているのだ。
しかし、同じように朝鮮人陶工の影響を受

始めた。馴れ初めや、どうして沖縄に通っていたのかも…。
「既読スルー」
普通の父親としては、そんな態度をとるのだろう。
加奈子は、東京からずっとこの瞬間の僕の顔を心待ちにしていたに違いない。ニヤニヤした顔が、それを物語っていた。
それに比べて、若者シーサー君の顔は対照的だった。彼が何を言っているのか、ほとんど耳に入っていないが、はにかみながら頭を下げる若者には、正直いい印象しかない。
「イチャリバチョーデー」
覚えたての言葉がつい口を突いた。
しどろもどろになりながらも誠意をもって話すシーサー君の顔に、笑顔に戻った。
そして、自作の皿を持ってきた。
「これに、きつぱんを入れて召し上がってください」

けていても、環境が違つと原材料となる土も違い、長い年月を経てそれぞれの場所に変化してきたということもあり、とても同じように見えないのがかえって面白い。
まずは、登り窯が見事な県指定文化財の南又窯を見学。登り窯から下に降りると、陶器製の骨壺が売られていた。それにしても、これは琉球以来の葬制、すなわち人の死後に遺体を処理する方法やその儀礼に関連して、陶器はその土地の文化を教えてくれる。思想家であり、民藝運動家の柳宗悦をして、大きな美的な財産と言わしめた伝統工芸だ。また、壺屋焼は素朴すぎるほど素朴であるが、現在は海の魚などの力強い模様が特徴…

彼は僕らがきつぱんを探していたことを知っていた。いや今考えると、加奈子と舞が話していたんだろう。そうだ。きつぱんの店が見つからない時、あの時も僕が居たら、シーサー君に電話もできなかったのだろう。彼の作品は素直で温かみがあり、作者の人間性を感じられた。飾りのない力強く素朴な作品にはきつぱんがよく映える。白い砂糖でつまれた無垢なきつぱんも大切にしてくれるのかもしれない。

(おわり)

ストーリー制作 監修 賀数仁然

この物語は史実に基づいた内容を元にしたフィクションです。
※1 向田邦子「沖縄修学旅行」(女人差し指「文春文庫」)
※2 綱引は早稲より雨乞いの儀式である。雨乞いは雲龍を呼ぶとされ、そのため大綱挽の綱を龍になぞらえる考え方がある。

「わ〜立派な古民家」
「聞いてんの？」
加奈子は僕の話も聞かず、写真を撮り始めている。壺屋には奇跡的に戦火を免れた古民家が残されているのだ。
小さな路地を進んでいくとその建物が見えてきた。
「新垣家住宅、国指定文化財だよ。奥に登り窯もあるけど、小さな路地と石積み、光に映える赤瓦や頭だけのシーサーが、まるで絵画を見ているようだって」
「って、舞が？」
「舞が。そしておすすめの窯元がこころへんなんだよね〜」
ケータイ片手にキョロキョロすると看板が見えた。
「ごめんくださいー」
2人同時に大きな声が出た。
「東京から来ました、津島です」
前掛けをしたいかにも陶工といた若者が驚いている。真っ黒に日焼けし、口をあんぐりとあけ、白い歯がまるでシーサーだ。
「あああ、いらっしやいませ。舞、さこのおんおんおん…」
「はい、お父さんです」
「ははは、はい初めまして、ここで陶工をしています。比嘉龍太といいます、お嬢様をください」



新垣家住宅



